

今回は「推量の助動詞」から入ります。このグループは一番数が多いので、覚えるのがちょっと大変かもしれませんが、やはりペアにして覚えていくとわかりやすいと思います。

まずはこのグループを、A「む」「じ」「けむ」「らむ」、と、B「べし」「まじ」「なり」「めり」「らし」「まし」の二つに分け、そのうえで二つずつペアにして押さえていきます。

5 推量 「む」「じ」「けむ」「らむ」「べし」「まじ」「なり」「めり」「らし」「まし」

A 「む」「じ」「けむ」「らむ」

a 1 「む」(「むず」)

①意志 [～しよう] 【主語＝一人称】

〈例〉いま帰りこむ 〈訳〉すぐに帰って来よう

②適当 [～のがよい] 【主語＝二人称】

〈例〉心にこそあらめ 〈訳〉思いのままにするがよい

③推量 [～だろう] 【主語＝三人称】

〈例〉十ばかりにやあらむ 〈訳〉十歳ぐらいであらうか

④婉曲・仮定 [～ような…・～としたらその…] 〈体言が下節〉

〈例〉配所の月、罪なくて見ん事 〈訳〉配所の月を、罪なくして見るようなこと

a 2 「じ」

①打消意志 [～まい、～ないつもりだ]

〈例〉寝殿に鶯みさせじ 〈訳〉寝殿に鶯をとませまい

②打消推量 [～まい、～ないだろう]

〈例〉よものがれさせたまはじ 〈訳〉まさかお逃げにはなれますまい

推量の助動詞「む」の意味は多岐にわたりますが、比較的見分けはしやすいでしょう。「む」を含む述語部の主語が一人称なら①「意志」、二人称なら②「適当」、三人称なら③「推量」、というのが原則です。ただし、あくまで原則ですから、必ず文脈は参照してください。こうした「む」の性格は、英語の will とよく似ています。

なお、②「適当」は例文にもあるように、「こそ～め」の形をとることが多い、というのもひとつの目安になります。また、①「意志」は、「～たい」と、願望風に訳した方がしっくりくる場合がありますので、一応知っておいてください。

④「婉曲・仮定」は、「む」の下に体言（名詞）が来る、という形式から判断できるのですぐにわかります。「仮定」はあまり出てきませんので、当面「婉曲」中心で考えておけばいいと思います。

「婉曲」は訳出しない方が文意が通りやすい場合には訳出しません。

〈例〉これが成らむさまを見む 〈訳〉これが成長する様子を見よう

また、「む」の直後に無音の形式体言（の／こと）が隠れている場合は「婉曲」で訳します。

〈例〉本性見えんこそ、口をしかるべけれ 〈訳〉本性が見えるようなことは残念だ

a 2 「じ」は、「む」の打消です。ただし意味は二つで、原則、主語が一人称なら①打消意志、三人称なら②打消推量、とするのも「む」と共通しています。ちなみに「じ」は、「～まい」と訳すと、打消意志でも打消推量でも通用するので便利です。

※「む」の中心的な機能は、「想起」です。つまり、「あたまに思い浮かべている」という状態を表すのです。一方、一見似ている助動詞に「べし」がありますが、この中心機能は「確信」です。「当然そうだ」という確信を表すのが「べし」なのです。そのニュアンスを少し強調したのが次の例です。

〈例〉われも行かむ。 〈訳〉わたしも行こうかなあ。

〈例〉われも行くべし。 〈訳〉わたしもぜったい行く。

つまり、「む」はぼんやりしているのに対し、「べし」はきっぱりしている、と言えるかもしれません。この「ぼんやり」感がクッションとして働くのが「婉曲」用法です。

〈例〉かけとむ方なきぞかなしき。 〈訳〉引き留める方法がないのが悲しい。

〈例〉かけとむ方なきぞかなしき。 〈訳〉引き留めるような方法がないのが悲しい。

例のように、用言と体言をダイレクトに結びつけるのではなく、「やわらかく」結びつける「婉曲」用法は、「む」の中心機能に依っています。もちろん、こうした用法は「べし」にはありません。

b 1 「けむ」

① 過去推量 [～ただろう]

〈例〉さしもあらざりけむ 〈訳〉そんなことはなかつただろう

② 過去の原因推量 [～たのゆゑだろう]

〈例〉いかなる故か侍りけん 〈訳〉どのような理由がございましたのでしょうか

③ 過去の婉曲・伝聞 [～たような、～たとかいう]

〈例〉関吹き越ゆると言ひけむ浦風 〈訳〉関を越えて吹くといつたとかいう浦風

b 2 「らむ」

① 現在推量 [～ているらだろう]

〈例〉いかに罪や得らむ 〈訳〉どんなに罪を得ているらだろうか

② 現在の原因推量 [～ているのらだろう]

〈例〉むべ山風を嵐といふらむ 〈訳〉それで山風を嵐と言っているのらだろう

③ 婉曲・伝聞 [～ような、～とかいう]

〈例〉蓬莱といふらむ山 〈訳〉蓬莱というような山

b 1 「けむ」は、過去の助動詞「き」に推量の助動詞「む」が融合してできた助動詞なので「過去推量」となります。①「過去推量」と②「過去の原因推量」は区別のつきにく

い事例もありますが、理由を述べる語句・または疑問詞が前にある場合、「原因推量」と考えるといいでしょう。また、体言が下接した時には、「む」と同じく婉曲用法となりますが、「人から伝え聞いた」というニュアンスになります。

b 2 「らむ」は、ラ変動詞「あり」に推量の助動詞「む」が融合し、頭母音「あ」が脱落してできた助動詞で、「現在推量」です。これも①「現在推量」と②「現在の原因推量」が見分けにくいのですが、同じく理由を述べる語句・または疑問詞が前にある場合、「原因推量」と考えてください。「らむ」にも婉曲用法がありますが、やはり「人から伝え聞いた」というニュアンスが出てきます。

「けむ」「らむ」については、まずは「過去推量」「現在推量」と判断できる事が大切です。それ以外のところは、実際の古文に当たりつつ、習得していけばいいでしょう。

※「む」「けむ」「らむ」は、「む」の兄弟といってもいい助動詞群ですが、注意しておかなければならないのは、すべて、接続する活用形が違う、という点です。

「む」－未然形接続 「けむ」－連用形接続 「らむ」－終止形接続
こうなる理由ですが、「む」は単なる「想起」なので「動作は未実現」ですから未然形に接続します。「けむ」は「過去」すなわち既実現の「想起」なので連用形接続、「らむ」は「現在進行」への「想起」なので終止形接続になるのです。やはり各活用形の性格に応じた接続になっているようです。

B 「べし」「まじ」「なり」「めり」「らし」「まし」

c 1 「べし」

- ①意志 [(きつと) ~しよう] 【主語＝一人称】
〈例〉この一矢にて定むべし 〈訳〉この一矢で決めよう
- ②適当 [~のがよい] 【主語＝二人称】
〈例〉人にまさらんと思ふべし 〈訳〉人に優ろうと思うのがよい
- ③命令 [~せよ] 【主語＝二人称】
〈例〉皆かくのごとく参るべし 〈訳〉皆、このように参れ
- ④推量 [~にちがいない] 【主語＝三人称】
〈例〉この子の後見なるべし 〈訳〉この子の後見人であるにちがいない
- ⑤当然 [~はずだ、~べきだ] 【主語＝三人称】
〈例〉今日は事忌みすべき日 〈訳〉今日は忌み慎むべき日
- ⑥可能 [~できる] 【主語＝三人称】
〈例〉頭さし出づべくもあらず 〈訳〉頭をさし出すこともできず

c 2 「まじ」

- ①打消意志 [~まい、~ないつもりだ] 【主語＝一人称】
〈例〉ただ今は見るまじ 〈訳〉今すぐは見るまい
- ②禁止 [~てはいけない] 【主語＝二人称】

〈例〉人にも漏らさせたまふまじ 〈訳〉誰にもお漏らしになってはいけません

③打消推量〔～まい、～ないだろう〕 【主語＝三人称】

〈例〉その人ならば苦しがるまじ 〈訳〉その人なら不都合ではあるまい

④打消当然〔～べきでない〕 【主語＝三人称】

〈例〉あふまじき人 〈訳〉会うべきでない人

⑤不可能〔～できない〕

〈例〉内裏にのがるまじかりけり 〈訳〉宮中に避けられない事情があったなあ

「べし」は、現代語でも「べきだ」という形で残っているので、感覚的には捉えやすいと思います。推量の助動詞「む」が「想起」であるのに対して、推量の助動詞「べし」は「確信」、つまり「それは当然だ」という判断を加える助動詞です。「む」を強めたのが「べし」だ、という説明も見かけますが、それは「想起」と「確信」の違いといっているでしょう。

ところで、古典文法で「べし」を扱うとなると、難易度が上がるようです。それはなぜでしょうか。

まず「べし」は助動詞の中でもっとも多くの意味を持ちます。ここでは六つのカテゴリーに整理しましたが、さらに細かく分類することもあります。また、文中の「べし」が、多数の意味の中から一つに限定できないことも多いので、なかなかやっかいなのです。例えば、例文「人にまさらんと思ふべし」などは、「人に優ろうと思うのがよい」（適当）でとっていますが、「人に優ろうと思え」（命令）や「人に優ろうと思うべきである」（当然）ともとることができます。

こういうことから、「べし」は混乱を招きやすい助動詞なのですが、ならばこそ、この助動詞は次のように整理しておくことをお勧めします。

まず、「べし」の中心的機能は「確信」つまり「それは当然だ」という判断を加えることにありますから、六つの意味の中で中心になるのは⑤「当然」です。これと人称を関係させると、次のように考える事ができます。

一人称	「わたしが～するのは当然だ」	→ 「意志」（きっと～しよう）
二人称	「あなたが～するのは当然だ」	→ 「適当」（～のがよい）【弱】
		→ 「命令」（～せよ）【強】
三人称	「それが～するのは当然だ」	→ 「推量」（～にちがいない）【弱】
		→ 「当然」（～はずだ、～べきだ）【強】
	「当然～する」＝「～の能力がある」	→ 「可能」（～できる）

このように考えておくと、六つの意味が整理できるのではないのでしょうか。ただし、これは原則であり、主語が一人称でも「推量」や「当然」でとる場合もありますし、先に書いたとおり、意味を一つに限定できない場合もあります。要は、「当然」（～はずだ、～べきだ）を中心に考え、文脈によって妥当な意味を選択していく、というスタンスでいいと思います。なお、「可能」は、「る」「らる」と同じく、否定文で頻出します。

さて、「べし」はもっとも意味が多岐にわたる助動詞ですが、六つの意味が覚えにくい

という声も耳にします。そんな場合は、「す・い・か・と・め・て」と覚えておくのも手です。坂を転がっていくスイカを「止めて～」と叫んでいるイメージですが、これは六つの意味の頭文字になっています。「推量・意志・可能・当然・命令・適当」、完全な語呂合わせです。

c 2 「まじ」は「べし」の打消です。「べし」にある六つの意味のうち、二人称主語に対応する「適当」と「当然」がまとめられて「禁止」になっているため、意味は五つです。「べし」の意味を押さえておけば、その打消ですから、基本的には新たに覚え直すまでもないでしょう。ただ、訳出の仕方は見ておいてください。

d 1 「めり」

① 推定 [～ようだ]

〈例〉え行くまじかめり、この雨よ 〈訳〉行く事はできないようだ、この雨で

② 婉曲 [～ようだ]

〈例〉今年の秋も往ぬめり 〈訳〉今年の秋も去りゆくようだ

d 2 「なり」

① 推定 [～ようだ]

〈例〉人まつ虫の声すなり 〈訳〉人を待つ、松虫の声がするようだ

② 伝聞 [～そうだ]

〈例〉世をうち山と人はいふなり 〈訳〉世を厭う、宇治山と人は言うそうだ

d 1 「めり」は、「見」と「あり」が融合してできた助動詞です。したがって、視覚的根拠に基づく「推定」を表します。例で言うと、「雨」を根拠に「行けないようだ」と推定するのです。ちなみにこの「推定」は、文法書によっては「推量」とするものもあります。「婉曲」は、「推定」から派生して丁寧な表現を表すようになったもので、こちらでは根拠は示されません。

d 2 「なり」は「音」と「あり」が融合してできた助動詞で、聴覚的根拠に基づく「推定」を表します。例で言うと「声」から「松虫」を「推定」しています。この音を根拠とした「推定」から、「人から伝え聞いた」という意味の「伝聞」が派生します。

なお、助動詞「なり」には、「断定」と「伝聞推定」の二種類がありますが、「断定」は体言及び連体形接続、「伝聞推定」は終止形接続（ラ変は連体形接続）という違いから見分けていきます。ただし、四段活用は終止形と連体形が同じであり、また、ラ変ではどちらも連体形に接続するため、文脈から判断することになります。また、「なるなり」「なんなり」「ななり」と、「なり」が重複して出てくることがありますが、この場合は、上が「断定」、下が「伝聞推定」です。「なるめり」「なんめり」「なめり」という言い方があることを知っていれば、「めり」と同じポジションが「伝聞推定」だ、と判断する事ができます。

上記「めり」「なり」は、それぞれ視覚的根拠、聴覚的根拠に基づく「推定」なので、

やはりよく似た兄弟という感じですが、併せて押さえておきましょう。

e 1 「らし」

①推定 [～らしい]

〈例〉春過ぎて夏来たるらし 〈訳〉春が過ぎて夏が来たらしい

e 2 「まし」

①反実仮想 [(～せば…まし、～ましかば～まし、～ば…ましの形で)

もしも～なら…なのになあ]

〈例〉家に在らば母とり見まし 〈訳〉家にいたなら母が看病してくれるのに

②ためらい [(疑問文で) ～しようかしら]

〈例〉しやせまし、せずやあらまし 〈訳〉しようかしら、しないでいようかしら

e 1 「らし」と e 2 「まし」は、残りもの二つでペアにしています。本来は別々に押さえる助動詞ですが、こうしておいた方が覚えやすいでしょう。

「らし」は、現代語の「らしい」とまったく同じですが、この助動詞の特徴は「明確な根拠がある」ということです。例でいうと、この下の句は「白妙の衣ほしたり天の香具山」となりますが、「天の香具山に真っ白な衣を干している」から「夏が来たらしい」となるわけです。このように推定「らし」には根拠が示される、ということ覚えておいてください。

e 2 「まし」は、①「反実仮想」を形成する助動詞としてとても重要です。これは「～せば、～ましかば、～ば」の箇所です。事実を反することを想定し（「もしも～ならば」）、それに対して「…まし」の箇所で非実現の空想をする（「…なのになあ」）という構造をいいます。つまり、英語でいうと「仮定法過去」ですね。

この反実仮想の前半部が脱落して「…まし」単独で用いられることもあります。 「…ならいいのに」と訳せばいいでしょう。

②は、「非実現の空想＋疑問」という構造から「ためらい」を表し、「～かしら」と訳します。一応、知識として持っておきましょう。

さて、Bグループの助動詞ですが、「べし」「まじ」「めり」「なり」「らし」は、すべて事実に対する「判断」を示す助動詞です。そのため、この五つは終止形に接続します。

ただ、「まし」は「反実仮想」つまり非実現ですから、未然形に接続するのです。

以上、ここまでが「推量の助動詞」といわれるものです。まず一〇個あることを押さえ、次にA、Bグループに分け、そして二つずつペアにして押さえていくと、随分理解しやすいのではないのでしょうか。ここが押さえられれば助動詞はあと一息です。

では、少し練習してみましょう。

練習1 次の傍線部の助動詞の意味を記せ。

- ①山ほととぎすいつか来鳴かむ ()
- ②心あらむ友もがな。 ()
- ③子となりたまふべき人なめり。 ()
- ④龍に乗らずは、渡るべからず。 ()
- ⑤われは行かじ。 ()
- ⑥子泣くらむ。 ()
- ⑦いかにわびしきここちしけむ。 ()
- ⑧男もすなる日記といふものを ()
- ⑨泣くめれど、涙落つとも見えず。 ()
- ⑩み吉野の山の白雪積もるらし ()

練習2 次の古文を現代語訳せよ。

- ①（その骨は）扇のにはあらで、海月のななり。
()
- ②鏡に色形あらましかば映らざらまし。
()

今回はここまでです。前回の復習問題の解答と補強問題を掲載しておきますので、練習してみてください。

頑張ろう、東高！

練習1・解答

- ①山ほととぎすいつか来鳴かむ (推量)
- ②心あらむ友もがな。 (婉曲)
- ③子となりたまふべき人なめり。 (当然)
- ④龍に乗らずは、渡るべからず。 (可能)
- ⑤われは行かじ。 (打消意志)
- ⑥子泣くらむ。 (現在推量)
- ⑦いかにわびしきここちしけむ。 (過去推量)
- ⑧男もすなる日記といふものを (伝聞)
- ⑨泣くめれど、涙落つとも見えず。 (推定)
- ⑩み吉野の山の白雪積もるらし (推定)

練習2・解答

- ①（その骨は）扇のにはあらで、海月のななり。
((その骨は、)扇の(骨)ではなくて、海月の(骨)であるようだ)
- ②鏡に色形あらましかば映らざらまし。
(もしも鏡に色や形があったならば、映らないだろうに)

復習問題 3 ・ 解答

問一	②	終止形	り	活用形	連体形	意味	存続(完了)
	④	終止形	たり	活用形	連体形	意味	存続(完了)
	⑧	終止形	けり	活用形	已然形	意味	過去
	⑨	終止形	り	活用形	未然形	意味	存続(完了)
	⑩	終止形	ぬ	活用形	連用形	意味	完了
問二	①	活用の種類	ラ行変格活用			活用形	連用形
	③	活用の種類	ク活用			活用形	連用形
	⑤	活用の種類	カ行上一段活用			活用形	連用形
	⑥	活用の種類	ラ行四段活用			活用形	終止形
	⑦	活用の種類	ラ行下二段活用			活用形	未然形

解説

問一②④は、正確には「存続（～ている、である）」です。選択肢などで「存続」がない場合は「完了の助動詞」と考えてください。⑧の活用形は已然形。已然形には「ば」「ど・ども」しか接続しません。後は「こそ」の結びですね。⑨は直前が「立て（t a t e）」となっていることから完了の「り」と判断します。ちなみに接続助詞「で」は「～ないで」と訳し、未然形接続です。⑩は「にけり」の形に着目し、「完了」の「ぬ」と判断します。この問題は、特に⑨、⑩をしっかりと押さえてください。

問二①「けり」＝連用形接続。③は形容詞ク活用です。「カリ活用」の方ですね。⑤は「起き・ず」となるので上一段、「たり」は連用形接続。⑥は動詞です（=become）。助動詞と勘違いしないように。「らむ」は終止形接続です。⑦「いひ入れ・ず」となり下二段活用、「む」は未然形接続でした。

補強問題 3 A (助動詞の接続)

1 次の傍線部の語の活用形をそれぞれ記せ。

- ① 若かり けるととき、 ()
- ② さやうの人の祭り 見 しさま、 ()
- ③ 潮 満ち ぬ。 ()
- ④ 送りに 来 つる人々、 ()
- ⑤ これに 過 ぎたる水練、 ()
- ⑥ 一夜の夢の心地こそ せ め。 ()
- ⑦ 今もかも咲き 匂 ふらむ、 ()
- ⑧ 帰りてまた 見 けむかも。 ()
- ⑨ この一矢にて 定 むべしと思へ。 ()
- ⑩ かぐや姫を迎へにまうで 来 なり。 ()

補強問題 3 B (助動詞の活用)

1 次の () 内の助動詞を適当な形に改めよ。

- ① このわたりに見知れ (り) 僧なり。 ()
- ② 行かずなり (ぬ) けり。 ()
- ③ 雪とのみこそ花は散る (らむ)。 () ← 已然形に
- ④ その難をのがる (べし) ず。 ()
- ⑤ 乗りたまふ (まじ) 御さまなれば、 ()
- ⑥ 龍を捕らへたら (まし) ば、 ()

⑦生年十七にぞなら（る）ける。 （ ）

⑧何にかなら（す）たまひたる。 （ ）

⑨あり（たし）事は、 （ ）

⑩行か（まほし）思ふに、 （ ）